

## 報 告

## 母親は医学用語をどの程度理解しているか

## —小児科外来におけるアンケート調査より—

大石 智 洋<sup>1)2)</sup>

## 〔論文要旨〕

日常、医療従事者が説明によく使用する医学用語がどの程度理解されているかを明らかにするため、小児科外来を受診した児の母親にアンケート調査を行った。

計98名の母親から回答を得た。調査した医学用語のうち「解熱剤」・「整腸剤」・「脱水」は正解率が高く、広く理解されていたが、「頓服(薬)」・「炎症」・「白血球」に関しては正解率が低く、あまり理解されていなかった。

他の施設での同様の調査と比較し、正解率に有意差がある用語もみられたが、特に正解率の低い用語は、具体的な言葉におきかえて説明する必要があると考えた。

そして、このような調査は医療従事者における説明技術を見直すために、きわめて有用であると思われる。

**Key words** : 小児科, 母親, 医学用語, 説明, アンケート調査

## I. はじめに

当院小児科外来では、急性疾患患児が受診する一般外来を主としている。一般外来においては、急性疾患患児の家族の不安を解消し、家庭において適切な看護ができるように、パンフレットなどを利用した、解りやすい説明を心掛けている。

しかし、医療従事者が解りやすいと考えている説明も、その際使用されている医学用語が患者側に理解されていなければ意味がない。そこで私達は、一般外来を受診した児の母親を対象に、医療従事者が説明の際によく使用する医学用語がどの程度理解されているのかという実態を明らかにするため、アンケート調査を行ったので報告する。

## II. 対象と方法

## 1. 調査対象

平成15年2月12日～2月15日(1回目)および平成15年3月19日～3月26日(2回目)に、小児科外来を受診した児の母親98名を調査の対象とした。

調査を行ったのは新潟県上越市所在の新潟県厚生連上越総合病院小児科である。同院は病床数199、小児科は外来1日平均80人で、ほとんどの児が急性疾患で受診している。

## 2. 調査方法

## 1) 調査内容

上記期間内に当科外来を受診した児の母親に、診療の待ち時間内に記述式のアンケート用紙に回答してもらった。その後、正しい回答のパンフレットを渡した。(正しい回答は国語辞

How Much Understand do Mothers about Medical Terms ?

Tomohiro OISHI

1) 新潟県厚生連上越総合病院 小児科(医師) 2) 北里大学医学部感染症学

別刷請求先: 大石智洋 北里大学医学部感染症学 〒228-8555 神奈川県相模原市北里1-15-1

Tel/Fax: 042-778-9206

[1551]

受付 03. 8. 7

採用 04. 4. 21

典<sup>1)</sup>と医学大辞典<sup>2)</sup>を参考とし、改めた)

なお、1回目の調査は「薬に関する医学用語」として、「坐薬」・「頓服(薬)」・「抗生剤」・「解熱剤」・「整腸剤」の5つの医学用語、2回目の調査は「病気や病態の説明に使用される医学用語」として、「化膿」・「脱水」・「潜伏期間」・「炎症」・「白血球」の5つの医学用語につき回答してもらった。

## 2) 倫理的配慮

母親に対しては、回答を強いることにならないよう配慮するため、調査の目的を説明し、承諾を得た上で回答してもらった。

また、プライバシー保持のため、アンケートは匿名とした。

## 3) 分析方法

回収した回答につき、それぞれの用語における正解率を算出した。

正解を判断する基準として、表1に正解と示した言葉が入っており、意味の大筋が合致しているものを正解とした。

なお、正解の判定は、小児科医師1名と看護師3名の、計4名で行った。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 対象者の背景

協力が得られた母親は、1回目の調査が48名、2回目の調査が50名の計98名であった。(調査の承諾を得た母親からのアンケート回収率は100%であった。)

協力を得た母親の児の年齢分布は図1に示すとおりで、1回目は1～13歳に分布し平均4.8歳、2回目は1～14歳に分布し平均5.5歳であった。母親の年齢層は図2に示すとおりで、1回

目・2回目とも20歳代から40歳代に分布し、大半は30歳代の母親であった。

## 2. 各医学用語の正解率

それぞれの医学用語の正解率を図3・図4に示した。

1回目に調査した薬に関する医学用語の正解率は、「坐薬」73%、「頓服(薬)」19%、「抗生剤」52%、「解熱剤」98%、「整腸剤」92%であった。

2回目に調査した病気や病態の説明に使用される医学用語の正解率は、「化膿」68%、「脱水」94%、「潜伏期間」58%、「炎症」24%、「白血球」32%であった。

## Ⅳ. 考 察

### 1. 薬に関する医学用語について

病気の治療において、薬の使用は不可欠であり、最も一般的な治療である。薬の投与方法を誤ると、重大な副作用をきたしたり、十分な治療効果が得られなかったりする可能性があるため、薬に関する医学用語の理解は重要である。

「坐薬」についての正解率は73%であり、誤答には、「解熱剤」や「吐くのを止めるお薬」など、薬の効用を回答している例が多かった。小児科では坐薬を使用することが多く、坐薬には解熱剤の他、鎮吐剤や抗痙攣剤などの種類があるためと思われる。したがって、坐薬を処方する際には、その使用方法や効用について十分な説明をし、理解を得ることが大切であると考えられた。

「頓服(薬)」については正解率が19%で、誤答例では「ねつさまし」「いたみどめ」など、

表1 調査した医学用語と正解

1回目：薬に関する医学用語		2回目：病気や病態の説明に使用される医学用語	
医学用語	正 解	医学用語	正 解
坐 薬	おしりに入れる薬	化 膿	膿をもつこと
頓 服 (薬)	症状のあるときだけ飲む薬	脱 水	体内の水分が失われた状態
抗 生 剤	菌を殺す薬	潜 伏 期 間	感染してから症状が出るまでの期間
解 熱 剤	熱を下げる薬	炎 症	熱・腫れ・痛みなどの症状をおこすこと
整 腸 剤	おなかのはたらきを整える薬	白 血 球	血液中の成分のひとつ

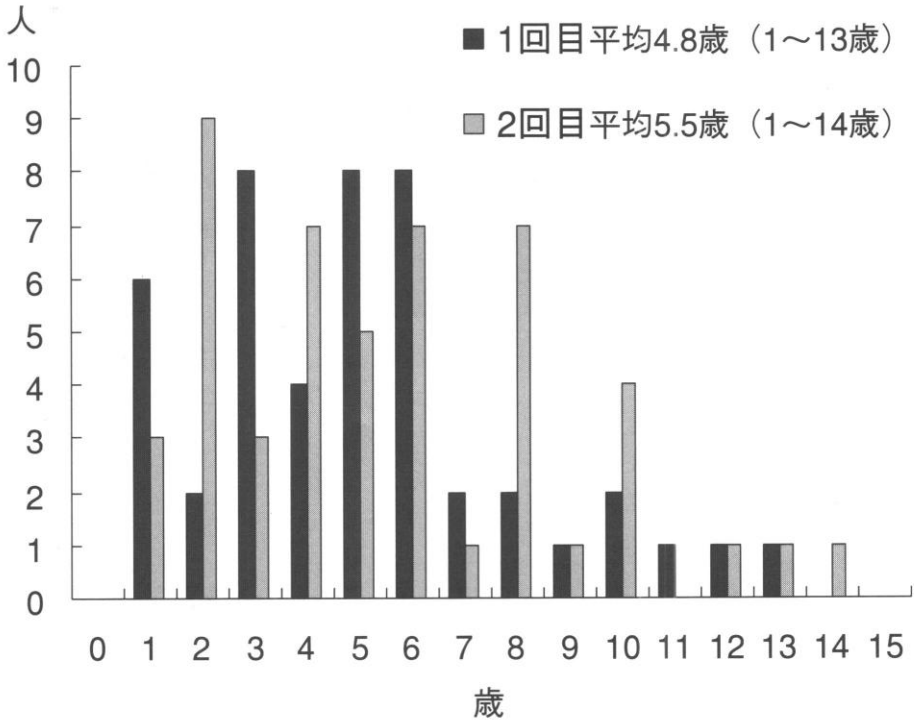


図1 児の年齢分布

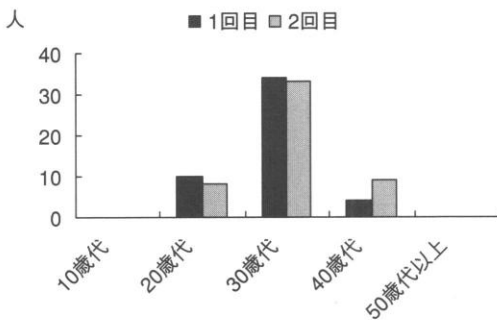


図2 母親の年齢層

坐薬と同様に薬の効用を回答している例が多かった。頓服薬に対する説明の際には、「症状のある時に使って下さい」と必ず付け加える必要があると思われた。

「抗生剤」は、小児科では頻度の高い処方薬であるにも関わらず正解率が52%で、誤答では、ウイルスを殺す薬と答えた人が多かった（不正解の30%）。抗生剤が、細菌感染症に対する治療薬であり、ウイルス性疾患には無効であると

ということが理解されていないと思われる。そのため何故抗生剤が処方されたかを説明することが重要であると感じた。

「解熱剤」・「整腸剤」に関しては、文字通りであるためかそれぞれ98%、92%と高い正解率であり、広く理解されている用語であると考えられた。

2. 病気や病態の説明に使用される医学用語について

現代、情報の繁雑化により、小児科を受診する児の母親は、病気に関して様々な知識を持っている。しかし、病気や病態の説明に使用される用語に対し、「何となくはわかっているのですが、うまく書けません」と答える母親が多かった。

「化膿」については、正解率は68%であった。「膿」という文字が入っているにもかかわらず、誤答としては「傷に菌が入る」など、膿むという症状と結びつかない回答が多かった。したがって、説明の際には「傷に菌が入り、膿んでいる状態です」と具体的に説明することが大切

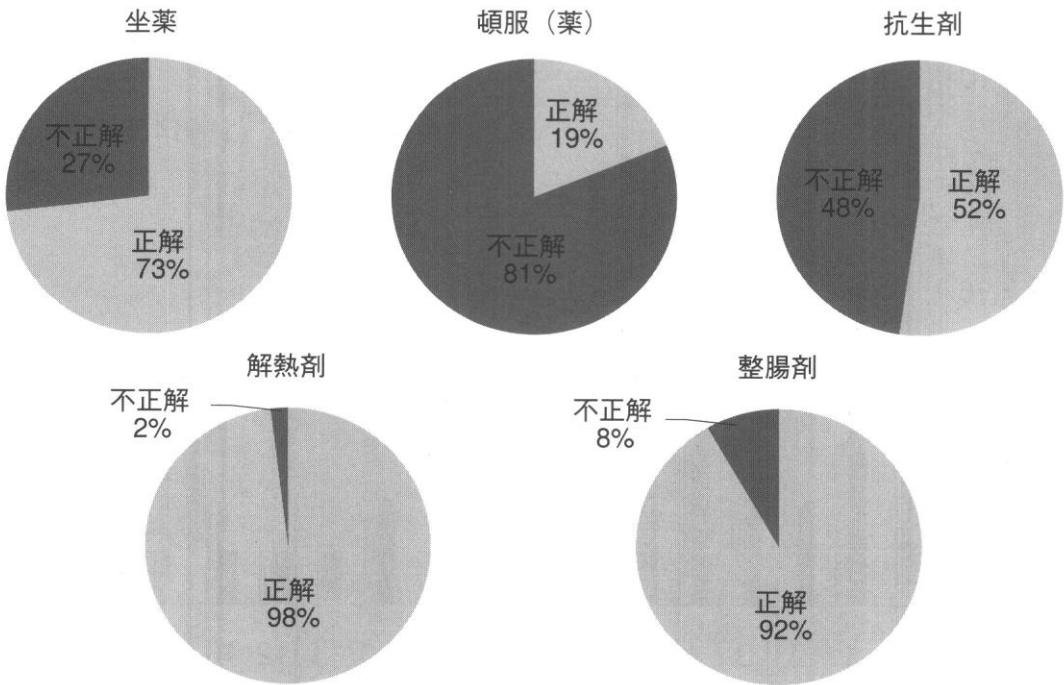


図3 薬に関する医学用語の正解率

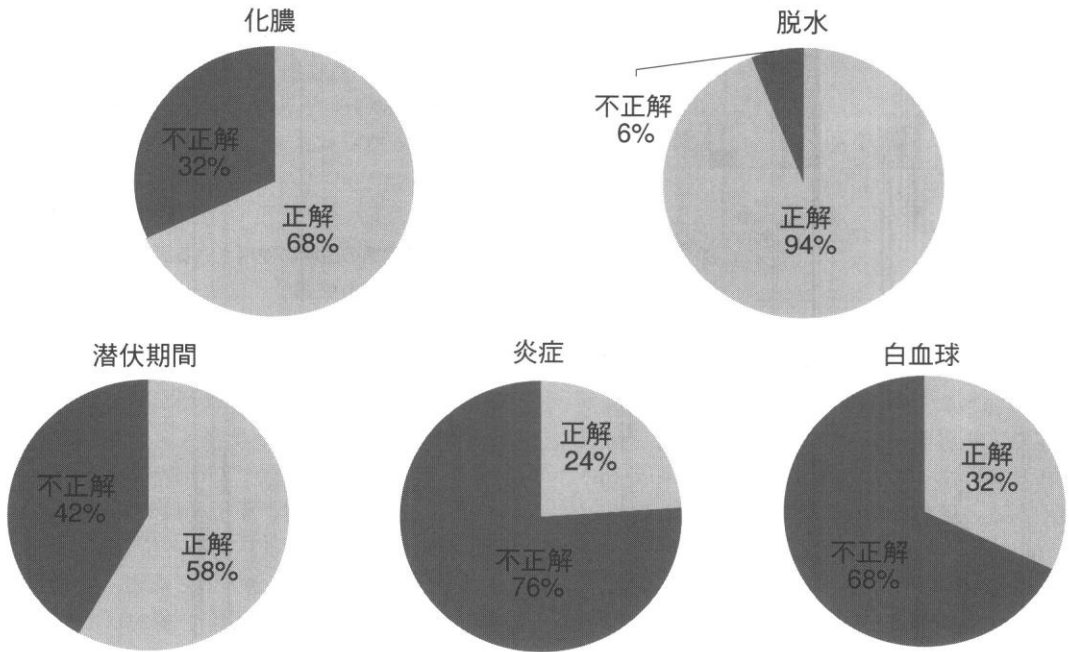


図4 病気や病態の説明に使用される医学用語の正解率

であると考えた。

「脱水」については正解率94%と、日常的に使われている言葉であり、広く理解されていると考えられた。

「潜伏期間」については、正解率が58%であった。誤答として「病気になってから治るまでの期間」「菌が体に入っている期間」などがあった。潜伏期間に伝染する疾患もあるため、「症状が出るまではおよそ〜日です」など具体的な説明が必要であると考えられた。

「炎症」については正解率24%で、無回答が多く(不正解の36%)、その他誤答としては「病気がひどくなる, 悪化する」のように漠然と悪いイメージで理解されている方が多かった。具体的に「熱, 腫れ, 痛み」などの症状と結びつかないことがわかった。

「白血球」については、正解率32%で、「炎症」と同様に無回答が多かった(不正解の34%)。正解の中には血液中の成分であると同時に「菌を殺す役割をもつ」など、具体的なはたらきまで回答した例があったが、一方では「血を固める」, 「血液中の病気」などの誤答例があった。

「炎症」および「白血球」については、病気の程度を知るためや、治療方針を決めるために行う血液検査の結果を説明する際、よく使用される用語であるが、無回答が多かったため、漠然と理解しているつもりでも実際は正しく理解していない母親が多いと思われる。したがって、今後説明する際には、腫れ, 血液の成分など具体的な言葉に置きかえて説明する工夫が必要と

思われた。

### 3. 他院における調査との比較

当院における調査の結果が、他の病院においても共通する結果であるのか、あるいは当院に特有の結果であるのかを検討する目的で、過去に、国立療養所松江病院小児科外来(以下松江病院とする)において行われた同様の調査<sup>3)</sup>との比較を行った。松江病院では、診療後に、「今回の受診で説明に使われた用語」に対する回答を記入する、記述式アンケートであった。

比較の方法として、それぞれの調査において対象となった医学用語のうち共通する医学用語につき、当院における各医学用語の正解率と松江病院における正解率との有意差の有無を、 $\chi^2$ 検定を用い検討した(p<0.05を有意差ありとした)。

結果を表2に示す。「解熱剤」・「脱水」・「抗生剤」・「炎症」に関しては、有意差がみられなかった。

「解熱剤」・「脱水」に関してはともに正解率が高かったことから、一般的に広く理解されている用語であり、逆に「抗生剤」・「炎症」はともに正解率が低かったことから一般的にあまり理解されていない用語であると考えられた。

「坐薬」・「頓服(薬)」・「化膿」に関しては有意差を認めた。

「坐薬」に関しては、当院の方が松江病院より高い正解率であった。松江病院において、誤答のすべてが解熱剤という回答で、処方内容の

表2 当院における調査と松江病院における調査との正解率の比較

	当 院	松江病院		当 院	松江病院
坐 薬	73% (35/48)	46% (16/35)	化 膿	68% (34/50)	94% (16/17)
	p<0.05			p<0.05	
頓 服 (薬)	19% ( 9/48)	42% (10/24)	脱 水	94% (47/50)	89% (32/36)
	p<0.05			N.S.	
抗 生 剤	52% (25/48)	57% (27/47)	炎 症	24% (12/50)	46% (11/24)
	N.S.			N.S.	
解 熱 剤	98% (47/48)	97% (30/31)	有意差の検定は $\chi^2$ 検定を用い、p<0.05を有意差ありとした。		
	N.S.		(N.S.: non significant)		

違いによるものと考えられるが、当院に比べ、坐薬すなわち解熱剤というイメージの強いことが示唆された。

「頓服(薬)」・「化膿」に関しては、当院の方が松江病院より正解率が低かった。この有意差はアンケートの方法の違いによるもの、つまり松江病院では一度説明を受けた用語に関する回答だったため、正解率が高い傾向にあったと考えられる。

大塚は「基礎知識を持っていない人に専門的な内容をわかりやすく話をすることは結構難しいものである。説明をしているうちに、つい専門用語を使って、相手に十分理解されぬままに終わり、独りよがりになってしまう。インフォームドコンセントの実際がいかに難しいことか、私達はそれをよく知っていなければならない」と述べている<sup>4)</sup>。

今回調査の対象とした医学用語は、いずれも当院で日常の小児科外来においてそのまま使用している医学用語であったため、正解率がかなり低い用語も含まれていたことは、我々医療従事者にとって意外な結果であった。

このように、医療用語に対し、医療従事者の意識と保護者の意識に違いがあることが、正解率の低い用語が存在した要因と考えられた。

そして、正解率の低かった用語に関しては、多くの保護者がその用語を用いた説明に対して十分理解していなかった可能性が高い。

したがって、調査終了後、我々は、日常診療において、特に正解率の低かった用語に関しては、それを安易に使用せず、更に具体的な言葉でわかりやすい説明をするよう心掛けている。

そして、今回の結果と正しい回答を小児科外来に掲示し、外来を受診する方が医学用語の理解を深めることに役立っている。

今後、さらに気がついた医学用語があれば再度調査を行い、また、保護者側だけでなく、医療従事者側に対しても、自分の説明がどの程度伝わっているのか等の意識調査を行うことも検討したい。

そして、このような調査が他の施設においても施行されることによって、我々医療従事者の

間で調査結果を共有でき、説明技術の向上に役立つのではないかと思われる。

## V. ま と め

1. 当院でよく使用する医学用語の中で、広く理解されていた医学用語は「解熱剤」・「整腸剤」・「脱水」であり、あまり理解されていない医学用語は「頓服(薬)」・「炎症」・「白血球」であった。
2. 過去に行われた同様の調査との比較では、「解熱剤」・「脱水」は同様に正解率が高く、「抗生剤」・「炎症」は同様に正解率が低かった。「坐薬」・「頓服(薬)」・「化膿」は正解率に有意差がみられ、各病院における説明や処方内容等により理解度の違いがあらわれる可能性が考えられた。
3. 特に正解率の低かった医学用語に関しては、安易にそのまま使わずに、具体的な言葉におきかえて説明した方がよいと考えられた。
4. 今回の調査は、医療従事者における説明技術を見直すためにきわめて有用であると思われた。

## 謝 辞

本論文をご校閲いただきました新潟大学大学院歯学総合研究科生体機能調節医学専攻内部環境医学講座小児科学分野 教授 内山 聖先生に深く感謝いたします。

また、本研究にご協力いただきました新潟県厚生連上越総合病院 内科系外来 梅田よしゑ看護師、水澤すみ子看護師、白石泰子看護師ならびに母親の皆様にも深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 松村 明. 大辞林, 第2版: 三省堂, 1995.
- 2) 相川直樹, 青木継哉, 青木幸昌, 他. 医学大事典, 18版: 南山堂, 1998.
- 3) 岸 和子, 斉田泰子, 山根聖子, 他. 小児科外来における医学用語の理解度調査. 日本醫事新報 2001; 4016: 42-44.
- 4) 大塚親哉. 病気の説明と小児の診療, 第2版: 南山堂, 1997: 2.